さまざまな人が集い、学び合う場として、また 生活する場として、大学の在り方をデザインして いく必要があります。これまで個別のケースに対 応していれば済んだことでも、これからは大学全 体としてインクルーシブな文化を体現できるよう にしていくことが求められているように思いま す。

「みんな同じ」という画一的な教育文化がある 小中高の学校教育にも共通しますが、教育環境 と社会との乖離や分断をつくらないようにしてい かなければなりません。

小林 これからの大学には、社会との関わり方を、 授業だけではなく、いろいろな形で取り入れてい くことが求められます。その一環として、実務家 教員の養成は意味がありますが、心配なのはミ スマッチをどう防ぐか。このプログラムを受けに くる社会人がイメージしているものと、我々の提 供するものとのズレをいかになくしていくか。

曽我 今の若者は、見かけはいい子でも、中身はものすごく重いものを抱えている子も多い。 そうしたギャップにも戸惑ってしまう人がいるかも しれません。 П

T

NEWS

LETTER

MDL.6

伊藤 私は若い人とのギャップを面白がりますけどね。"宇宙人"と出会うみたいに。今は「電話をする」んじゃなくて「通話する」と言うんだ、なんて。新しい感覚に触れるワクワク感みたいなものを持ってもらいたい。

曽我 そうした 「違い」 が前提になる他者観があること、大切だと思います。 大学自体が 「違い」 があることを経験し、さまざまな価値に出会える場となっていくことが求められていると思います。

TEEPは今の「閉じた」状態を刺激する役目を持っているように感じます。ネット配信の講義科目、土日祝日や夜間開講を原則とする実習系科目など工夫して取り入れます。開講までにさらに予行練習や検証の時間を取って、よりよいコースにできれば。実際のコースが始まるのを楽しみにしています。本日はありがとうございました。



進化型実務家教員養成プログラム Web サイト https://teep-consortium.jp/





TEEP

進化型実務家教員 養成プログラム

VOL.6

NEWS LETTER

不確実性や複雑性の高まりは、新型コロナウイルスの感染拡大をはじめとして、気候変動や人権侵害などSDGs (持続可能な開発目標) に関わる状況に鑑みれば明らかです。SDGs達成に向けて、私たち一人一人の「当たり前」が問い返されているともいえます。対自然、対他者との在り方を振り返りながら、一人一人の、また組織や社会、さらに大学自体の在り方についても考える時機にあります。実務家が学び直すプログラムであるTEEPの基本コースには、「持続可能な社会構築論」という本学オリジナルの科目があります。ソーシャル・デザイン能力を培うための当該科目では、データ・サイエンスとSDGs (持続可能な開発目標)という2本柱を特徴としています。その意義について、また、TEEPが大学自体にもたらす影響について、基本コースに携わる人文社会系の教員らの鼎談から紹介します。

2020年5月27日・座談会から

ソーシャル・デザインの視点 【SDGs】

参加者(登場順)

TEEPプログラム基本コース担当講師

名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 准教授

小林直三 曾我幸代

● 名古屋市立大学理事・副学長 大学院人間文化研究科 教授

伊藤恭彦

名市大オリジナルの 「プラスアルファ」 盛り込む

小林 もともと実務家教員養成プログラムを文科省に申請するにあたって、基本要件がありました。それらは、まず大学とは何か、現状と課題、教育方法・学習評価方法の基礎理解を学ぶ「大学教育と進化型エバンジェリスト」、大学での教育・研究におけるハラスメントを含む倫理の理解についての

「教育・研究倫理」、研究推進にあたっての基礎能力や研究指導力を修得する「研究方法概論」、シラ



バス作成やゲストスピーカーとして実際に大学の講義を行う「大学教育実践演習および事前・事後指導」といった科目に反映されています。

大学の教員を目指していた人は、ある程度、大学と関わりを持ち続けています。一方、20年ほど企業で働いてきたような人が実務家教員になると、20年前の大学の様子は分かるけれど、今の大学のことは分かりません。20年前

と今とでは、シラバスの書き方から成績の評価法、 ハラスメントの感覚などもまるで違います。そこを 誤解して入ってきてしまうと、実務家教員側も大学側も困ってしまいます。ですから、そういうものを 最低限理解してもらい、大学で基本的な授業ができ るように科目が盛り込まれています。

ただし、それだけだと名市大や連携校でやる意義

がないので、プラスアルファをいかに加えるかがポイントでした。それがソーシャル・デザインを踏まえた実務家教員の基礎力養成、データ科学も含む [持続可能な社会構築論] と、多職種連携PBL (課題解決型学習) の実践演習および事前・事後指導です。

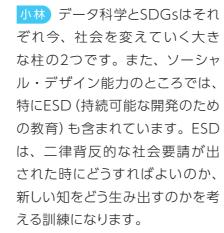
管我 大学教員のなかには、小中高の教員免許状を持っている 人もいれば、持っていない人も います。大学教員はそうした教員 免許状の取得が求められてこな

かった、つまり、基本的には"無免許"でも教壇に立てるわけです。これまではそうした環境で「大学で教える」という暗黙知のようなものを共有してきました。それをあえてカリキュラムにしていくのは違和感もありますが、基本要件、最低条件として提示していくわけなんですね。

一方で本学がプラスアルファとして盛り込むソー

シャル・デザインに、データ科学とSDGsが含まれているのはなぜなのでしょう?

データ科学とSDGsが2つの柱



環境保護と開発の問題はもちろんですが、今回の新型コロナの問題でも二律背反が突き付けられています。感染予防で社会経済活

動を止めることと、社会を維持するために経済を動かすことのどちらか一方だけを選ぶことはできません。

二律背反の課題を解決するためには、ソーシャル・デザインの考え方が必要です。実際の社会は複雑で、いろいろな技術や能力を持っている人と連携しなければいけないという意味で、多職種連携ともつながります。



伊藤 コロナの問題で、社会は急激に動きました。 良い面としては、今まで[お上]の号令で変わってき たことの多い日本社会の中で、現場からいろいろな 知恵が生まれてきたことです。在宅勤務やオンライ ン会議、飛沫対策などを通して、現場から世の中を 変える力が生まれています。

今まで大学が社会に送り出してきたのは、学内で身につけた抽象的な知と、地域社会での調査や実習などのフィールドワークでの経験をいかにつなげるか、すなわち専門知の普遍化であったと思います。

これからは、大学にそれぞれの 現場の経験知や実践知を持ち込んで、大学の得意とする普遍的 な知と積極的に融合させなければなりません。

重要な役割を果たすのが実務

家教員です。実務家教員は、現場で自らが生み出してきたものを、より普遍的な知にしていくこと、また社会を変えていく力になるのを実感できるはずです。

学生にとっては、単に将来の仕事に関する実務を 学ぶだけでなく、社会の最先端で一人一人が社会を 変えていくという自覚を持ち、実務家と共に課題解 決できれば、確かな自信につながり、ポジティブな 影響を受けることになるでしょう。

また、SDGsの発想はこれからの人たちに必須です。本来これは科学的な知見、普遍的な知識はもちろん、現場で寄り添うケアの精神など、人間としてさまざまな能力を持っていなければ考えられません。今、世間ではSDGsがビジネスチャンスになっていますが、実務家教員には人間の多様な能力や知識だけでなく、感性やモラルなどの面からもSDGsの意味を示す必要があります。

「学び直し」のきっかけづくりに

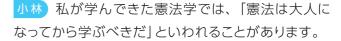
曽我 SDGsが目的化すると、うわべだけの「SDGs ウオッシュ」になる可能性があります。総論としては「誰一人として取り残さない」という誰もが賛同する言葉を掲げているため、肯定的ですが、各論としてはどうでしょう。

気候変動に関わる諸問題は、若い世代にとっては 「気候正義」とデモで掲げる身近なテーマとなってい ます。しかし、その危機感を本当の「自分ごと」にで きなければ長続きしませんし、実際の社会経済構造 が変わらなければ解決しません。

実務家のバッググラウンドは経済活動で、そこを根本的に問い直すことはチャレンジングなことだと思います。それを覚悟して共に歩んでいける伴走者になれるか、私たちも問われます。

今回のコロナによる行動変容についても同じことがいえます。確かに表面的な行動は変わるのかもしれませんが、本質的な部分まで変わるでしょうか。SDGsが私たちに求めているのは、まさに個々人の「生活様式」にまで踏み込むことといえます。TEEP

という短期間のプログラムで、どこまで踏み込めるでしょう。



必ずしも、さまざまな人権問題を実感できないまま、何となく大学で憲法や人権を学んでいた人たちが多いのではないでしょうか。でも、本当の憲法学は、そこで終わるのではなくて、いざ社会に出て政治や人権などの問題に突き当たった時、また戻ってきて学ぶべきだというわけです。つまり、1回の学びではないよということです。

TEEPも同じで、半年や1年で本当のソーシャル・デザインが分かるとは思えません。その後にいろいろなことにぶつかって、もう1回、勉強し直さなきゃと戻ってきてくれればいい。大事なのはその最初のきっかけをつくることと、大学として「学び直し」を受け入れる態勢ではないでしょうか。

伊藤 大学は今まで通過機関だったけれど、今おっしゃったのは、絶えず帰ってきてはまた出掛けていく「ベースキャンプ」のようなイメージ。本来、生涯学習もそういうものですよね。



| 養成 | 小項目 | 内容 |
|------------------|------------------------|--|
| 教員基礎力 | 大学教育と 進化型エバンジェリスト | 大学とは何か、現状と課題、教育方法・学習評価方法の基礎の理解 |
| | 教育・研究倫理 | 大学での教育・研究におけるハラスメントを含む倫理の理解 |
| | 研究方法概論 | 研究推進にあたっての基礎能力や研究指導力の修得 |
| | 大学教育実践演習及び 事前・事後指導 | シラバス作成やゲストスピーカーとして教壇に立つ経験の蓄積 |
| ソーシャル・ デザイン能力 | 持続可能な社会構築論 | データ科学の活用に関わる基礎的、概観的知識の習得 SDGs や ESD の基礎的知識の習得 |
| 多職種連携・ PBL 能力 | PBL の実践演習及び 事前・事後指導 | PBL の企画・実施、内容や方法の改善指導 |

